

演劇を取り入れた日本語教育10年間

河内千春（早稲田大学）

今まで約10年間、早稲田大学日本語教育研究センターで「日本語でドラマを作る」「戯曲を読む」というクラスを担当し、同時にシニア劇団に入り演劇活動も続けている。クラスの活動をどうすればより演劇に近づけられるかを考えてきたが、演劇クラスではなく日本語クラスでなければならない。授業の詳細はオンラインジャーナル2号と3号で述べている。今回は、その時に課題としたことをどう解決していったかの報告を行いたい。

課題の一つは、発表会の場所についてであった。発表会は普段は教室で行っていたが、劇場を使ってみたいと思っていた。2018年春学期に早稲田どらま館という小劇場を借りて発表会を行うことができたが、教育の世界と演劇の世界に基本的な違いがあることがわかった。この経験から、発表会は教室で十分だと思った。

もう一つの課題は、評価のしかたについてであった。演劇のクラスならグループだけの評価を出せばよいかもしれないが、日本語クラスではグループ中心の活動の中で個人を評価しなければならない。「日本語でドラマを作る」クラスでは、グループごとのドラマ発表だけでなく作成過程のさまざまな提出物や提出状況などを個人の評価の対象とした。「戯曲を読む」クラスでは、グループごとのリーディング発表だけでなく内容理解のためのレポートを書いて発表するなどの活動を個人の評価の対象とした。

この10年間、ほぼ同じ内容のクラスを行ってきたが、授業の曜日と時間を変更すると参加する学生の人数が大きく変わり活動の進め方を変えていかなければならないこともあった。毎回、新しい気づきの連続である。